



2006.7.1

美華書館名称考(2)樽本照雄 1
 商務印書館の火災(3完)沢本香子11
 晩清小説作者掃描(柒)武 禧15
 アディソンの漢訳小説神田一三17
 『新編増補清末民初小説目録』の『小説海』
 掲載作品正誤・再補杜 筆恩23
 漢訳アラビアン・ナイト(16)樽本照雄24
 清末小説から28 アディソンに関連して思うことがある。外国語学習補助教材は、外国文学受容史の1分野として成立するのではないか。外国文学に接する窓口になったと考えれば、これはひとつの研究課題だ。資料が保存してあれ

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

美華書館名称考(2)

樽本照雄

前号で何歩雲が美華書館の上海移転を1859年としたのは、何によったのか知らないと言った。その典拠を見つけたのでつけ加える。浄雨「清代印刷史小紀」に「1859年、アメリカの宣教師が上海に美華書館を設立し(該館は、1845年寧波に設立された).....」(張静廬輯註『中国近代出版

史料二編』上海・群聯出版社1954.5所収。355頁)とある。

私の言及しなかった文献を筧文生氏よりご教示いただいた。それによって補っておきたい。発行年がさかのぼるが、ご了解のほどをよろしく。

陳旭麓、方詩銘、魏建猶主編『中国近代史詞典』(上海辞書出版社1982.10。535頁)

前身は花華聖經書房。1844年にマカオで設立。のち寧波へ移り、1860年上海へ移転し美華書館と改名した。

賀聖薫の記述をそのまま受け継いでいることがわかる。中国歴史大辞典・清史卷編纂委員会編『中国歴史大辞典・清史下』(上海辞書出版社1992.10。556頁)も同様だ。

そのほかのものはまとめる。いずれも、1844年マカオで花華聖經書房 1945年寧

波 1860年美華書館に改称、と説明する。部分的に異なっている、基本は同じだ。
李華興主編『近代中国百年史辞典』(杭州・浙江人民出版社1987.10。510頁)、**湯志鈞主編『近代上海大事記』**(上海辞書出版社1989.5。142頁)、**上海市地方志辦公室編『上海辞典』**(上海社会科学院出版社1989.7。411頁)。中国近代現代出版史編纂組編『中国近代現代出版史學術討論会文集』(北京・中国書籍出版社1990.8)に収録された3本の論文。すなわち、**葉再生「現代印刷出版技術的伝入与早期的基督教出版社」**(54頁)、**張樹棟「近代印刷術的伝入和我国民族印刷業的崛起」**(107頁。1845年寧波に移転し美華書館と改称)、**張奇「1840-1900新教在華出版書報活動初探」**(150頁。改称には触れない)。**張仲礼主編『近代上海城市研究』**(上海人民出版社1990.12。909頁)。

大同小異の記述だとくりかえしている。いささか食傷気味である。以上の著者たちにすれば、文章の主題とは関係のない部分で、名前を挙げられるのは迷惑かもしれない。先行論文を引用してどこが悪い、といわれそう。私は、批判しているのではない。似たりよったりの文章が生産されている状況があるということだけをいいたいのだ。つまり、新しく資料を提出する研究者は、まれだという意味でもある。

2 新しい展開

美華書館研究に新しい見解を加えたの

は中国人研究者だった。

熊月之『西学東漸与晚清社会』(上海人民出版社1994.8。169、481頁)

2カ所に記述がある。ひとつは、寧波でのこと。別のひとつは上海の美華書館だ。

概要を示す。1845年、美国長老会伝教士が寧波に印刷所を建設した。鍵となる人物はコウルである。彼は印刷業務に詳しく、1844年2月香港に到着し、同年マカオに移る。1845年7月19日、コウル夫妻は印刷機器を携えて寧波に到着すると、1ヵ月あまりの準備をへて9月1日に印刷所を正式に開始した。この印刷所は「華花聖經書房 The Chinese and American Holy Class⁷⁷ Book Establishment」という。「華」は中国を、「花」は花旗国、すなわちアメリカである。1860年、上海に移転し美華書館と改称した。

熊月之は、華花聖經書房に注をつけて説明する。筆者(熊月之)が見たこの印刷所の出版物は、すべて「華花聖經書房」と署名している。英語名称の順序も、中国、アメリカである、と。それまで、研究者の全員がマキントッシュを信じて「花華」と書かいていた。それを、熊月之は「華花」と転倒させたのである。注目すべきだろう。

出版物の原物で確認したというのだ。ここには明記していないが別の文献によると、熊月之は、オックスフォード大学ボドレアン図書館の蔵書を閲覧したらしい。

寧波での正式開業を9月1日とするの

も新しい。資料にもとづいているとは思
うのだが、その典拠を示さない。

もうひとつの場所では、美華書館の前
身は、寧波華花聖經書房であり、1860年
に上海東門外へ移転、のち北京路に移る、
とのべる(熊月之、張敏著『上海通史』第6
巻晚清文化(上海人民出版社1999.9。103頁ほ
か)にも上の文章を要約している)。

熊月之は、「新伝教士早期中文書刊出版
史研究」(初出未見*5)において上述の新
見解を公表している。それ紹介するのは、
万啓盈「中国近代印刷業発展八題」(『中
国印刷史学術研討会文集』北京・印刷工業出
版社1996.5。87頁)だ。

華花聖經書房については、次に述べる
韓琦による記述がある。

韓琦は、新発見に別の資料を加えて紹
介する。その発表の場所は日本だという
のが、私に隔世の感をいだかせる。中国
「文化大革命」以後の交流断絶時期をへ
て、ようやく日中の研究交流が実現して
いるという意味だ。

**韓琦「19世紀における漢字分合活字の
開発史」**(『タイポグラフィックス・ティ』第
165号1994.11.10。訳者不明)

訳文の記述から関係部分を引用する。

「それら伝道印刷所の中で比較的早く
開設されたのが、マカオのアメリカ長老
会の「華英校書房」であった」(7頁)

「筆者(注:韓琦)は最近北京図書館の
マイクロフィルムの中からアメリカ長老
会印刷所華英校書房が1844年マカオで出
版した分合活字の見本帳『新鑄華英鉛
印』(図8)(註18)を見つけた」(9頁)

「図8」として、北京図書館蔵マイク
ロフィルムによつたらしい該書の表紙を
掲げる。一部破れている。アラビア風と
いおうか門構えの意匠に、上方に横書き
で「華英校書房」、右から「道光二十四
年」、中央に「新鑄華英鉛印」、左下に
「印蔵香山澳門」と印刷してある。道光
二十四年は、1844年に当る。

「註18」は、英文書名を示す。すなわ
ち、“Specimen of the Chinese type belonging
to the Chinese Mission of the Board of Foreign
Mission⁷⁷ of the Presbyterian Church in the U. S.
A.”, Macao, 1844 である。「ママ」とつ
けたのは、原書を所蔵する図書館の表記
が“Missions”となっているからだ。私は、
原書を見ていないからそのままにしてお
く(後述)。

華英校書房という名称を提出したのは、
韓琦が最初だと思う。

もう少し、引用を続ける。

「1845年印刷所はマカオから寧波に移
り、「華花聖經書房」と改称した」(12
頁)

従来の「花華聖經書房」とは異なる
「華花聖經書房」を提出している。熊月
之と同じ発見だ。なぜ、「花華」を「華
花」に変更したのか、韓琦はその理由を
述べない。説明しないが、出している
『耶穌教要理問答』*6および『地球説
略』という書籍にその表示があるらしい。

名称の変遷をまとめて次のように書い
ている。

「マカオのアメリカ長老会印刷所華
英校書房(1844年) 寧波華花聖經書房

(1845年) 上海美華書館(1860年頃)となる」(15頁)

私は、上の書き方を見て「アメリカ長老会印刷所」すなわち APMP の漢訳が「華英校書房」だと理解した。これが、私が抱く違和感のもとだったかもしれない。

韓琦の該文は、次の書物に吸収された。

張秀民、韓琦『中国活字印刷史』(北京・中国書籍出版社1998.4)

前出『新鑄華英鉛印』の表紙を示し、それに添えて「澳門美国長老会印刷所“華英校書房”印，道光二十四年(1844年)」(178頁)とある。その注2には、原書名を *Specimen of the Chinese type belonging to the Chinese Mission of the Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the U. S. A., Macao, 1844* とする。前出論文で「ママ」としておいた箇所は、“Missions”が正しいのだろう。

さらに、小宮山の提供になる『耶穌教要理問答』の扉を掲げる(181頁)。これが前出論文に掲載されるはずであった「図11」にちがいない。見れば、右側に「大清道光二十九年華花聖經書房寧波」と印刷されている。「華花」部分は、左右に並記だ。もうひとつの『地球説略』の表紙も日本での重版本とならべて掲げているのが興味深い(182頁)。こちらは、「寧波華花聖經書房刊/1856」と読める。

ついでにいうならば、韓琦は触れていないが、ほかにも『古今万国綱鑑録』(寧波・華花聖經書房1850。原本未見)があるらしい。

今まで誰も疑っていなかった花華聖經書房ではなく、華花聖經書房だとは驚く。当事者であったマキントッシュが「花華聖經書房 The Chinese and American Holy Classic Book Establishment」と漢字を添えていくら説明したとしても、原物で示されているのだからこれ以上の説得力はなからう。

ここでも、以上をまとめて「澳門美国長老会印刷所“華英校書房”(1844年)寧波華花聖經書房(1845年) 上海美華書館(約1860年)」(185頁)と書く。私がかえして引用するのは、これが新しい発見だと考えるからだ。

韓琦の発見をいちやく紹介したのは、小宮山だった。前後するがご了承いただきたい。

小宮山博史「分合活字 Divisible type 史稿」(『季刊』印刷史研究』第1号1995.10.1)

主題は、分合活字だ。韓琦論文が日本で発表されたのもその関係らしい。説明によると、漢字の偏旁冠脚を組み合わせて1字の漢字活字をつくる方法をいう。活字印刷の歴史における試行錯誤のひとつだと考えられる。手間がかかってしかたがなからう。しかも、できあがりひとつの漢字として均衡がとれているとは限らない。現在では廃れてしまった理由だと思われる。

小宮山は、『新鑄華英鉛印』の英文原題を翻訳して『アメリカ合州²²国長老会海外伝道会議の中国伝道会が所有する漢字活字見本帳』とする(10頁)。さらに、名称については、「American Presbyterian

Mission Press の中国名が「華花聖經書房」(寧波)、「美華書館」(上海)の他に、澳門では「華英校書房」と称していたことがわかったのである」(10頁)と説明している。

私は、この論文を読んでいた。さらに、同氏著「明朝体、日本への伝播と改刻」(印刷紙研究会編『本と活字の歴史事典』柏書房2000.6.5)が出た。私は、該書236頁によって以前の記述を訂正したのである(樽本『初期商務印書館研究(増補版)』清末小説研究会2004.5.1. 42頁)

范慕韓主編『中国印刷近代史(初稿)』
(北京・印刷工業出版社1995.11)

こちらには「華花聖經書房および美華書館」という項目がある。

「1844年2月、コウルが責任を持ってアメリカから長老会書館をマカオに移した*7。中国到着後、華花聖經書房(The Chinese and American Holy Classic Book Establishment)と名付け、翌年、寧波へ、1860年上海へ移転し美華書館と改名した。そのアメリカでの名称は一貫して American Presbyterian Mission Press という。のち、同文書会の顧客はずっと「長老会書館」とよんでいた」(76頁)

「長老会書館」と顧客から呼ばれていた、という箇所には私は興味を感じる(後述)。また、范慕韓は、華花聖經書房とマキントッシュの記録した花華聖經書房との違いに注目した。

彼は、まず、賀聖薫が1931年に書いた説明が60年余にわたって中国の研究者によって引用されつづけたことをいう。誰

しもが気づく事実なのだ。ついで熊月之がオックスフォード大学ボドレアン図書館の蔵書からもたらした書影により、1849年の『天文問答』(78頁に書影をかかげる)、1850年の『平安通書』、1856年の『地球説略』がすべて「華花聖經書房寧波」と表示していることを指摘する。その結果は、以前の通説を否定することになるのも当然だろう。すなわち、1. 華花聖經書房であって花華聖經書房ではないこと、2. 印刷所は1856年以前寧波にあったときはまだ美華書館と改名していない、ということだ(77頁)。奇しくも日本の小宮山とほぼ同じ結論を得た。

該文に新しく掲げられた1849年の『天文問答』は、書影を見る限り『耶穌教要理問答』の表紙と同じ意匠であることがわかる。

范慕韓が、華花聖經書房についてどのような解釈をしているのか翻訳して次に示す。

「長老派教会印刷所(原文:長老会書館)がマカオ、寧波にあった時期に「花華聖經書房」とする印刷物を出しているのを今まで見たことはない。だが、マキントッシュが1895年に書いた The Mission Press in China (中国における教会印刷所)という英文原書第10頁には The Chinese and American Holy Classic Book Establishment の後ろに漢字で「花華聖經書房」と注をつけている。そこで、長老派教会印刷所はそのころ「華花聖經書房」あるいは「花華聖經書房」というふたつの名称を併用したことがあったのかどうか、疑問

が生じるのである」(77頁)

范慕韓は、韓琦あるいは小宮山の提出した華英校書房には気づいていないようだ。だが、マキントッシュの記述を尊重しつつ、当時の出版物を複写であれ手元におきながら、その記述の不一致を問題にしている。ふたつの可能性があるとし、結論を留保しているといってもいい。どちらか一方を簡単に捨て去っていないところに范慕韓の慎重な研究態度をみることができる。

王立新『美国传教士与晚清中国現代化』(天津人民出版社1997.3。306頁)

1844年マカオに設立されたのが花華聖經書房だと書いている。マキントッシュを参考資料にあげているが、あるべきところに美華書館の名前が見えない。

張樹棟、龐多益、鄭如斯等著『中華印刷通史』(北京・印刷工業出版社1999.9)

大部な印刷史だ。分担執筆だからか美華書館についての記述にブレがある。要点だけを書き抜く。

1844年、マカオに花華聖經書房を設立。1845年、寧波に移転して美華書館と改名。1859年、上海へ移転(435頁)。従来の説明をくりかえす。ところが、463頁の一覧表では、「美華書館 / 1860年創設 / ギャンブル主宰 / 華花聖經書房が寧波より上海に移転後美華書館と改名」と説明する。「華花」と書いているところから新説を取り入れていることがわかる。また、467頁において「美華書館」の項目を立てて特に説明する。前身は「長老会書館」であり、1844年マカオに移って華花聖經書

房と改称、翌年寧波へ移転する。1860年寧波から上海へ、美華書館と改称した。意見の調整はなされなかったらしい。

『上海掌故辞典』(上海辞書出版社1999.12/2000.5第2次印刷。328-329頁)

美国基督教会が寧波に「花華聖經書房」を設立し、1860年、それを上海に移して「美華書館 Presbyterian Mission Press」と改称した。最新の研究成果は盛り込まれていない。中国ではどうしても時間的な落差が生じるらしい。APMP と美華書館の関係が把握できていないこともわかる。また、夏瑞芳(粹芳)が美華書館で働いていたと誤解もしている。

鄒振環『晚清西方地理学在中国 以1815至1911年西方地理学訳著的の傳播と影響を以て中心』(上海古籍出版社2000.4。85-86、356頁)

書名が示すように西洋の地理書がどのように漢訳されたかの研究だ。書籍を確認しながら執筆しているのが鄒振環論文の一貫した特長である。

その鄒振環が、奇妙な書き方をしている。例の華花聖經書房についてだ。1844年、長老会はマカオで花華聖經書房(あるいは華花聖經書房、華花書房とも称する)を創設した(85-86頁)。

1844年マカオ花華聖經書房説は、固く信じられている。韓琦が発見した華英校書房など、どこにもでてこない。

附録にある『地球説略』の発行元を寧波華花書房1856年版としているのが目につく。書影で見れば、あきらかに華花聖經書房だから、名称が一致しない。華花

書房は、どこから出てきたのか。私はおかしいと感じる。鄒は、実物で確認したのではないのか。確認したから「あるいは華花聖經書房、華花書房とも称する」と書いたのか。疑問としておく。

姚民権、羅偉虹『中国基督教簡史』(北京・宗教文化出版社2000.11初版未見/2004.11第3次印刷。73-75頁)

初版の発行年からいえば、この順序になる。ただし、私が見たのは後刷り本で、2006年になってからのことだ。

姚民権らは、該書において「長老会的美華印書館」と題して紙幅を割いている。誤植ではない、1ヵ所を除いて、美華印書館で通す。

その冒頭は、こうだ。「美華印書館は英語を直訳すると美国長老会伝教印書館としなければならない」(73頁)

著者たちの認識では、APMP の漢語通称が美華印書館だということになる。勘違いしているらしい。

はじめは花華書房と称し、1844年初にマカオに創設された。1年後、寧波へ移転し、1860年に上海へ再び移転した、と説明する。ここでも花華書房が出てくる。

さらに奇妙なのは、商務印書館創設にかかわる部分だ。ギャンブルが寧波から上海に連れてきた一部の職人は、彼のもとで少なからぬ技能を学び、後に資金を集めて中国最初の民族資本である商務印書館を設立した、書く(73頁)。これは事実とは異なる。商務印書館を創設した夏瑞芳らは、ギャンブルと一緒に寧波から上海へ来たわけではない。姚民権らは、

風説を無批判に取り入れているだけではないのか。

中国のキリスト教関係者には、それなりの基礎資料があるのかと思えば、そうではなさそうだ。紹介すればするほど混乱状態であることが判明する。

《上海出版志》編纂委員会編『上海出版志』(上海社会科学院出版社2000.12。223頁)

マキントッシュ論文をふまえているだけ。

葉再生『中国近代現代出版通史』第1巻(北京・華文出版社2002.1。96-97頁)

1844年2月、マカオに花華聖經書房(The Chinese and American Holy Classic Book Establishment)を設立した。1845年、寧波に移転し、1859-60年の間に上海へ移り美華書館(The American Presbyterian Mission Press)と改名した。

あいまいな部分を残してはいるが、英語を並記し先行文献を吸収して書かれていることがわかる。

張樹棟、龐多益、鄭如斯『簡明中華印刷通史』(桂林・広西師範大学出版社2004.8)

1999年版を簡明にした。1844年マカオ花華聖經書房説は、本書においてもくりかえされる(199頁)。ただ、「華花」としたところは新しい。新旧混用か。また、美華書館の項目において次のように説明する。「(美華書館の)前身は美国基督教長老会の「長老会書館」である。1844年2月、アメリカの宣教師コウルが中国マカオに移って「華花聖經書房」と改称した。翌年、コウルの提案によって華花聖經書

房を寧波に移転した。1860年、さらに寧波より上海に移り「美華書館」と改名する」(219頁)

マキントッシュの漢訳を取り入れながら、一部を先行論文によって訂正した解説となっている。ここでも韓琦説は、無視される。

最近出版された**文庸、楽峰、王継武主編『基督教詞典(修訂版)』**(北京・商務印書館2005.2。330頁)では、こう説明している。1844年マカオに設立し、のち寧波に移転した。1860年に上海へ移り美華書館と改名する。この部分だけを見れば、正しい。しかし、華英校書房に触れない。前身は「美華²⁷聖經書房」だと書いている。なんの根拠もなく「華花」を「美華」に書き換えているのにはがっかりする。

蒋晓麗『中国近代大衆伝媒与中国近代文学』(成都・四川出版集团巴蜀書社2005.6。130頁)は、あいかわらず「**花華聖經書房**」と表記する。

一方で、熊月之論文を取り入れた著作も公表された。**李偉『中国近代翻訳史』**(済南・齊魯書社2005.8。140-144頁)だ。1844年マカオ創設、1945年寧波に移って**華花聖經書房**、1860年に上海移転で**美華書館**と改称した。そこまではよろしい。だが、該書も、残念ながらマカオでの名称**華英校書房**に触れない。

以上を見れば、中国では記述が以前とおなじように混沌としているといわざるをえない。

マカオで華英校書房、寧波に移り華花

聖經書房に改め、上海に移転して再度改称して**美華書館**となった。この大筋は、中国人研究者の多くからは支持されていない。というよりも、華英校書房の存在が知られていない。問題であると思う。

出版史、あるいはキリスト教研究の一部だということはあろう。文学研究者にとっては、関係のない事柄か。美華書館だけを特にとりあげる意味を見いだせないのかもしれない。

しかし、日本では、美華書館を主題とする研究が発表されている。日本における活版印刷の発展に、美華書館の存在が大きく影響しているからだ。

美華書館をおりこんだ小宮山の論文は、前出『本と活字の歴史事典』に吸収されている。

ここでは、宮坂弥代生の論文2本をまとめて紹介する。

宮坂弥代生「美華書館に関する歴史的考察 史料紹介をかねて」(中央大学『大学院年報』第4号総合政策研究科篇2001.2.20)

「マカオ時代の American Presbyterian Mission Press 美華書館前史 その1」(明治学院大学キリスト教研究所『紀要』第36号2004.1.20)

宮坂は、新しい資料を発掘しながら美華書館をめぐる問題を整理して以下のように結論づける(本稿に關係する箇所だけを抜き書きにしますのでご了承いただきたい)。

1844年2月23日、マカオにて華英校書房として開設

1845年7月19日、寧波に移転、華花聖經書房と改称

1860年12月、上海に移転、美華書館と改称

月日までが記入されるほどの詳細さである。研究の深化を思わずにはいられない。

このように詳しい記述を目にすると、問題はすべて解決しているかのように見える。だが、私が問題にしたいのは、華英校書房、華花聖經書房、美華書館という名称そのものだ。どこから、これらの漢語がでてくるのか。

ここで少し脇道にはいる。宮坂論文に関連して、名称問題とは違うことをつけ加えたい。

宮坂は、1937年頃に出版された新資料を提出した。それによって、美華書館の歴代責任者15名が明らかになった。美華書館廃業時の責任者は、クラレンス・ダグラス (Clarence W. Douglass) だと指摘したのは、注目すべきだ。

だが、私の手元にある次の書籍の説明とは、すこし異なる。

D. MacGILLIVRAY(Ed.) "A CENTURY OF PROTESTANT MISSION IN CHINA (1807-1907)" SHANGHAI: PRINTED AT THE AMERICAN PRESBYTERIAN MISSION PRESS, 1907

貴重だと思うのは、これに、APMP の最高責任者名がまとめて掲載されているからだ (636頁)。

a list of the Superintendents:

R. Cole, 1844-1846.

Mr. Loomis and Dr. McCartee, 1847-1848.

Mr. Coulter, 1849-1852.

R. Q. Way, 1853-1857.

W. Gamble, 1858-1869.

J. Wherry, 1869.

J. Butler and C. W. Mateer, 1870.

J. L. Mateer, 1871-1875.

W. S. Holt, 1876-1880.

G. F. Fitch and A. Gordon, 1881.

W. S. Holt and A. Gordon, 1882-1883.

J. M. W. Farnham, 1884-1887.

G. F. Fitch, 1888.

名前の後ろに在任期間を明示しているのが参考になる。これほど詳細な資料は、今まで私は見たことがない。

日本に活字の製造法を伝えた人物としてウィリアム・ギャンブル William Gamble (日本ではガンブルと呼びならわす) が有名だ。ギャンブルは第5代責任者であった、というのが従来の説明である。宮坂は1937年頃の文献により、それをくつがえして第6代目であると指摘した。

しかし、上の一覧表を見てほしい。最高責任者は、ふたりが兼務していた時期もある。また、重任している人もいることがわかるのだ。数えれば、ギャンブルは、やはり第5代目なのである。

さらに、彼らの支援者として以下の名前があがっている。原文を引用しよう。

These have been assisted at various periods by Rev. J. E. Cardwell, and Mr. J. Dalziel. Mr. G. McIntosh joined in 1890, Mr. J. Williamson in 1894, Mr.

C. W. Douglass in 1898, Rev. C. M. Myers in 1904, and Mr. A. Mitchell in 1905. The last named five are still on the staff.

後ろの5人というのが、つづく最高責任者であったようだ。年数は着任の年を示しているのだろう。ダグラス以後にも、何人かが責任者の任にあったことがわかる。

この文献は、中国における印刷所設立について、つぎのように記述する。「この有名な印刷所は、リチャード・コウルのもとで、1844年6月17日、最初にマカオで設立された。This famous Press was first established 17th June, 1844, in Macao, under Mr. Richard Cole.」1845年、寧波に移転し1860年まで維持され、上海が終焉の地となったという解説である。

マカオにおける印刷所設立の年月日を1844年6月17日としている箇所は、特に興味深い。

今までは、コウルのマカオ到着の日付をもって印刷所の開始としていた。それも、マキントッシュが1月23日と2月23日の2種類を記録していたから迷わされる。宮坂は、別の資料によって「1844年2月23日が正しい」と結論してこの問題を解決した。

コウルのマカオ到着は、2月23日かもしれない。だが、マカオ到着日、即印刷所の設立だ、と認定するのは無理があるのではないか。マカオ到着から印刷所の設立準備に約4ヵ月弱の時間がかかったと考えればよい。マカオにおける APMP

の設立は、上に見える「6月17日」というのが合理的な理解だと考える。

ただし、6月17日が特別な意味をもっているかどうかはわからない。当時の中国は旧暦だから道光二十四年五月初二日にあたる。意味のない日付なのか、あるいはキリスト教のなにかの記念日に重ねているのか。

アメリカの研究論文では、以下のものだけを紹介する。

CHRISTOPHER A. REED *GUTENBERG IN SHANGHAI: CHINESE PRINT CAPITALISM, 1876-1937* (『谷騰堡在上海：中国印刷資本業の発展一八七六 - 一九三七年』) HONOLULU, UNIVERSITY OF HAWAII PRESS, 2004 / 又、TRONTO, UBC PRESS, 2004

リードは、本書において美華書館の変遷については簡単にしか説明していない。たとえば、注65で次のように書いている。

The American Presbyterian Mission Press was called Huahua shengjing shufang (Huahua Bible Publishers) when it was located in Macao, but it changed its Chinese name to the more widely recognized Meihua shuguan after it moved to Ningbo in 1845. (p. 306)

アメリカ長老派教会印刷所は、マカオでは“Huahua shengjing shufang”と呼ばれていたとする。だが、漢字を示さないから Huahua が花華かあるいは華花なのか、区別がつかない。華と花は漢語では

同音で声調だけが異なるからだ。さらに、1845年寧波に移転してから美華書館と改名したという。古い知識のままであることがわかる。

いくつかの説明を見てきて、マカオ・華英校書房 寧波・華花聖經書房(花華聖經書房) 上海・美華書館と変遷してきたことがわかる。基本はそれで正しいのだと私も思う。ただし、漢語の出現のしかたが、どこかしっくりとこない。APMP と漢語のそれぞれの名称が結びつきにくいと感じる。 罫

【注】

- 5) 論文初出の詳細をしらない。熊月之「新教伝教士早期中文書刊出版」宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第1巻 武漢・湖北教育出版社2004.10
- 6) 文中には、カッコに入れて(図11-12)と表示する。しかし、「図11」は掲載されていない。編集の手違いだと思われる。なお、『耶穌教要理問答』については次の論文が発表されている。小宮山博史「19世紀ヨーロッパ・中国での明朝体金属活字の開発、そして日本への伝播」『武蔵野美術大学研究紀要』第23号1993.3.31。40-41頁
- 7) 范慕韓は、74頁において「1836年以前、美国長老会はマカオにおいて活版印刷所を経営していた」と書いている。矛盾した記述ではなかるうか。

本誌次号の公開は10月1日を予定しています

商務印書館の火災 (3完)

いわゆる「焼け太り」の不可解

沢本香子

新出資料 商務印書館が説明する火災

火災について商務印書館が説明した文章は、すでに見ている。すなわち、『外交報』壬寅第19号((第21期)光緒二十八年八月十五日(1902.9.16)補印)の広告だった。

新しくここに提出するのは、『中外日報』に掲載された広告だ。『外交報』の文章と部分的に重なる。商務印書館自身が、火災のあとで説明しているという点で同様に貴重だ。そればかりか、保険について言及している部分がある。『外交報』広告よりも詳しい。見逃すことはできない。

『中外日報』光緒二十八年八月十三日(1902.9.14)

「商務印書館照常交易」

啓者本館向設上海北京路四十一号中外馳名生意蒸蒸日上乃不幸於七月十九晚間忽遇火災現承三井洋行沙遜洋行並華商所設之長安公司各將保險銀兩如數繳訖足見該保險行皆信實可靠至焚損之機器等貨均由該保險行拍出售去惟尚幸鑄字房釘書房電

気房書板房棧房等均未殃及現用本棧備售之新機器鉛字等件仍在北京路原處隔壁四十号内照常工作如蒙 仕商採辦機器託印書報及批購書籍寄遞往來銀函等請至四十号本賬房便是本館失慎後荷蒙 諸親友盛情慰問銘感無既惟未能一一踵門道謝為歉

附陳藉鳴謝悃伏維 鈞鑑

商務印書館謹啓

「商務印書館は平常どおり営業をしております」

拜啓。本社はこれまで上海北京路41番地において国内外に名前をひびかせ営業は日の出の勢いでありましたところ、不幸なことに七月十九日夜間、突然火災に見舞われました。三井洋行、沙遜洋行ならびに中国資本設立の長安公司各社より規定通り保険金の支払いを受けました。それら保険会社が信用でき頼りになることがわかります。焼けて損傷した機器などはすべて該保険会社が競売にかけました。ただ、幸いなことに活字鑄造室、製本室、電気室、書板室、倉庫などはすべて災難をまぬかれ、また、弊社で販売を準備しておりました新しい機器活字などを使用し、北京路の元のところの隣家40番地におきまして現在平常どおり営業を行なっております。機器購入、刊行物の印刷、書籍の注文などを皆様方からいただけるようでしたら取引の現銀封筒などは40番地の本社事務室へお願いいたします。本社が火を出しましたあと、皆様よりご厚情お見舞いを賜り心よりお礼を申し上げます。じきじきにおたずねし感謝をすることができないことを遺憾に存じます。

謝意をのべ謹んでご高覧をお願いいたします。

商務印書館敬具

興味深いことが書いてある。商務印書館の発した社告である点を再度強調しておきたい。伝聞ではなく、当事者の証言だからだ。

まず、文中に出てくる固有名詞について説明する。

この広告で最も注目されるのが、保険会社の名前を具体的に掲げている箇所である。上に各種文献を紹介したが、このことを指摘したものはない。

いわく、三井洋行、沙遜洋行、ならびに長安公司である。

三井洋行とは、いうまでもなく三井物産の上海支店をさす。遠山景直『上海』(出版社名不記1907.2.28)の167頁には、三井と沙遜の名前が見える。また、同書168頁

能一踵門道謝為歉 附陳藉鳴謝悃伏維 鈞鑑

商務印書館謹啓

政者本館向設上海北京路四十一號中外馳名生意蒸蒸日上不幸於七月十九日夜間忽遇火災現承三井洋行沙遜洋行並華商所設之長安公司各將保險銀兩如數足見該保險行信實可靠至損之機器等件均由該保險行拍賣去惟尚幸鑄字房釘書機等件仍在北京路原處隔壁四十号本賬房便是本館失慎後荷蒙 諸親友盛情慰問銘感無既惟未能一一踵門道謝為歉 附陳藉鳴謝悃伏維 鈞鑑

商務印書館謹啓

には「東京海上保険会社(上海最古) / 明治火災保険会社……代理店・三井洋行」と記載される。これを見れば、三井洋行が東京海上保険会社の代理店だったことが説明しなくてもわかる。だいたい、東京海上保険会社の創設者益田克徳は、三井洋行創設者益田孝の弟なのだ。両者が一丸となって上海に出ていっても不思議ではない。

ここで思い出して欲しいのが夏瑞芳が保険のブローカーをやっていたという事実だ。三井洋行と関係があるのではないか。1901-05年に山本条太郎は、三井物産上海支店長の任にあった。保険という業務を介して夏瑞芳と山本の関係にひとつの道筋がたつのである。

もうひとつ、『上海指南』(商務印書館宣統元年(1909)五月初版 / 七月再版)には、以下のようにある。

三井 Mitsui & Co. 經理人 J. Yamamoto 在英租界四川路四十号。水火二險。

山本条太郎の名前が、なぜかしらローマ字表記で掲載されている。水害と火災の保険2種類を扱っていた。

沙遜のほうは、同書にふたつ掲載される。

老沙遜 David Sasson. & Co. Ltd 經理人 A. C. Moses 在英租界黃浦灘路二十三号。水火險。
新沙遜 C. D. Sassoon & Co. 經理人 S. A. Hardoon 在英租界黃浦

灘九江路轉角。

ただし、長安公司の名前は見あたらない。商務が保険会社名をみつつあげているのは、3カ所に分散して保険をかけていたという意味だ。

「規定通り保険金の支払いを受けました」というのであれば、3カ所だから保険金は十分に支払われたらろうか。もしそう考える人がいるとすれば、それを短絡しているという。保険のブローカーは、契約を取るのが仕事である。まず、自分が加入する。つぎに親戚縁者友人を勧誘するのが普通だ。そうして成績をあげたことにする。夏瑞芳は、保険会社3社と契約を結んでいた。広く薄くであろう。

「それら保険会社が信用でき頼りになることがわかります」と書くのは、夏瑞芳みずからの副業をも宣伝しているのだ。

また、保険をかけた範囲も上記の広告から推測できる。

「焼けて損傷した機器などはすべて該保険会社が競売にかけました」という箇所からは、もともとあった印刷機器だけに保険がかけてあったと了解する。だからこそ、保険会社が競売に出した。この競売に関して、夏瑞芳の身にあとでとんでもない事件が発生する。

以前に問題とした張孝基が説明する12万円の新しい印刷機器が、ここに出現している。見て欲しい。「販売を準備しておりました新しい機器活字など」である。新しい機器というのだから、外国から輸入した例の12万円の物件に違ひなからう。

くりかえすが、この新しい印刷機器の代金は、火災保険金とは関係がない。商務印書館の借金として残ったはずだ。

商務印書館の社告より三日後の同月十五日付『申報』に裁判ニュースが掲載された。これが商務印書館の火災がらみなのである。しかも、夏瑞芳が逮捕されたというのだから驚く。

『申報』光緒二十八年八月十五日(1902.9.16) 附張

「英美租界公堂瑣案」

包探竇如海解夏瑞芳到案稟称此人開設印書館曾保火險上次被焚經保險行賠銀若干將燼餘之物交王国記拍賣内有值洋銀一百元之墨水一箱被夏私匿報由小的拘解請究王延律師哈華託声訴情由夏称墨水未經保險司馬諭令保險行与拍賣人自行理處

「英米租界裁判所の些細案件」

警察官竇如海は、夏瑞芳を護送し出廷して以下のように報告した。当人は印刷所を創設し火災保険をかけていた。このたび火災にあい保険会社より若干の賠償金を得た。焼け残りの品を王国記に引き渡して競売した。そのなかに価格洋銀百元のインク1箱が存在したが、夏によって不正に隠匿されたという報告があったため逮捕し護送したので取り調べていただきたい。王は弁護士プラットを招聘し事情を訴えて、インクには保険をかけていないと夏はいう。判事は、保険会社と競売人が自分たちで処理するように命じた。

夏瑞芳が逮捕された事実は、今まで商務印書館の関係文献で触れられたことはない。当然だろう。いくら事実であったとしても、自社の歴史に社長逮捕を記載したがる関係者はいないからだ。

記事の後段に意味の通じない箇所がある。王と弁護士プラットについてだ。後日、これに関して訂正文が掲載された。

『申報』光緒二十八年八月十八日(1902.9.19)

正字 本月十五日附張所録英美租界公堂瑣案中夏瑞芳一案律師哈華托係夏所延当日誤為王今既訪明合即更正

弁護士プラットを招聘したのは王ではなくて夏瑞芳であったという。逮捕された夏瑞芳が弁護士を雇った。これで話のつじつまがあう。

ハ華託はプラット Winfrid Alured Comyn Platt (1859-?) である。イギリス人の弁護士、1892年に中国に来た。彼は共同経営者を変えていくつかの法律事務所を開業している*4。

夏瑞芳が逮捕された理由に注目したい。価格洋銀百元のインク1箱を隠匿したというのだ。それに対して、インクには保険をかけていないとプラット弁護士は異議申し立てを行なった。

私が興味深く思うのは、保険のかけかたが細かいという事実だ。機器備品の一つひとつにわけて決めたらしい。

商務印書館の自社広告には「焼けて損傷した機器などはすべて該保険会社が競

売にかけました」とあった。つまり、保険をかけた機器備品については、罹災後は保険会社の所有になると理解できる。保険会社は、それを競売人王国記に委ねた。だから、インクを隠匿した、いやもともと保険をかけていない、という問題が発生すれば、結局は保険会社と競売人に処理をまかせるよりしかたがない。これが判事の判断だった。

上記新聞記事で私が注目するのは、「若干の賠償金」という箇所だ。

商務印書館が失火で受領した保険金は、多額ではありえない。これが、各種文献を検討した結果、私が得た答えだった。それを裏付ける資料だと考える。俗にいう「焼け太り」などあろうはずがない。

最後に、火災と新印刷所建設に関する私の見解をくり返す。

従来の見方は変えなければならない。事実を反映しているとは思えないからだ。すなわち、火災にあったことと印刷工場新築は、もともと因果関係がなかった。

罫

【附記】渡辺浩司氏より資料の提供を受けました。感謝します。

【注】

4) 黄光域『近代中国専名翻訳詞典』(成都・四川人民出版社2001.12. 282頁)に以下のものが収録されている。

Platt, Macleod & Wilson 哈華託律師公館

Platt, Macleod, Gregson & Ward 哈華託律師公館

Platt, Teesdale & Macleod 哈華託律師公館

Platt, White-Cooper & Co. 哈華託公館
: 古沃公館



晚清小説作者掃描 (柒)

武 禧



(零二三)

莫厘悟色子

小説創作：《天下第一絶妙奇書》

莫厘悟色子：(未見任何資料，待考)

(零二四)

錫山張夏

小説創作：《漁樵話》

錫山張夏：未見任何資料。錫山原在江蘇無錫西郊，與惠山相聯。現爲錫惠公園。錫山張夏，疑爲無錫人張夏。

(零二五)

郭友松

小説創作：《玄空經》

郭友松(1821-1889)：松江府婁縣(今上海松江)人。名福衡，字友松，別署：吳中介士，晚號婁村老福，室名風涼堂。其父名權，號柳村，諸生，精醫道。自幼穎悟，年十三入邑庠，被譽爲神童，然屢試不第。年至半百(同治十二年・1873)方中鄉試舉人。多才芸，通六法，擅書畫，尤

工人物、山水。嘗於核桃上以煙簽刻人物、鳥獸、山水並好題識。性豪放不羈，恃才傲物，不諳世事，晚年奔走於松滬間，以售畫自給。晚年撰小說《玄空經》八回，意為空泛玄妙、子虛烏有之談，語多詼諧諷刺，且用方言。另撰有《新婚文》。又有自傳《吳中介士郭先生傳》。

(零二六)

松排山人

小說創作：《鐵冠圖》

松排山人：(未見任何資料，待考)

(零二七)

西泠野樵

小說創作：《繪芳錄》

西泠野樵：不知生卒年月。自述“年十七逢粵寇之亂”。“粵寇之亂”當指太平天國起義，時在道光三十(1851)年，則西泠野樵生於1834年。不知姓字。自署“始寧竹秋氏”。“竹秋”應是字或號。因其為“始寧”今浙江上虞人。以“西泠”為筆名，則與現杭州有關。《繪芳錄·序》作於“邗上”應在現揚州。根據以上分析。可知：

西泠野樵：約道光十四(1834)年生於浙江上虞。自幼好讀小說，對《水滸傳》、《紅樓夢》、《西廂記》、《長生殿》、《還魂記》、《琵琶記》等愛不釋手，因此常受父親、老師責備，但是並無改進。17歲后因太平天國起義而不再讀書，郁郁不得志而遊歷於江浙一帶，以與人詩詞唱和。家貧。同治七(1868)年開始以小說形式記錄自己的經歷及所見所聞，名《繪芳

錄》。十年后的光緒戊寅(1878)年殺青於揚州，時44歲。

《繪芳錄·序》全文如下：

余於童年即愛觀諸家說部，若《水滸傳》、《紅樓夢》等書，偶一展閱，每不忍釋，以是遭父師之責者，不知凡幾，終不能改。年十七，逢粵寇之亂，即廢讀就食四方，猶東塗西抹，好作小詩詞，勾人唱和。近歲貧居無聊，思欲作小說以自述生平抑鬱之志，得八十回，顏曰《繪芳錄》，越十稔而始成。其中實事實情，毫無假借，惟佐以詞采，敷以閑文，庶可貫通一氣，不致閱者之徒多滋蔓耳。時在光緒戊寅嘉平月中旬，始寧竹秋氏自志於邗上梅妍寓樓之南軒。

(零二八)

石玉昆

小說創作：《三俠五義》

石玉昆：字振之，別號問竹主人。天津人。他的生卒年月尚無確切考證。或說為“道光年說書人”，或說為“咸同說書人”。或說光緒十八年(1892)尚在世。有確切的說法是“生於嘉慶十五年(1810)左右 死於同治十年(1871)”。如按此計算，道光元年為1823年，石玉昆13歲。同治十年為1871年石玉昆61歲。如從18歲道光六年(1828)開始到55歲同治五年(1866)說書，那麼他在道光年說書22年，在咸豐年說書11年，在同治年說書5年，“道光年”與“咸同年”之說並無矛盾。

長期唱書於北京，以唱單弦轟動一時。他唱書的地點在北京的一個雜耍館。雜耍館為他專辟一淨室以做休息。上場唱書時，

卓上擺列銀亮的銅底錫壺一把，九江瓷官窯脫胎的茶缸一個，十樣錦的煙碟幾個。橫列退光磨漆的三弦一架。

石玉昆唱書以巧腔妙句爲著。他唱書時“款動了三弦如施行號令，滿堂中萬籟俱靜，鴉雀無聲。但見他指法兒玲瓏，嗓音兒嘹亮，形容兒瀟灑，字句兒清新”。聽衆的反映是“衆諸公一句一誇、一字一贊，合心同悅，衆口同聲”。以至於喜歡高攀的聽衆常爲他預備美酒香茶、細膩點心。要是他肯領受，就可以眉飛色舞的驕傲於人。

石玉昆唱書的內容以《包公案》爲主，將其唱辭整理，形諸文字，有同治六年（1867）《龍圖耳錄》。1879年始有《三俠五義》出版。他有再傳弟子潘誠立，文誠玉等改“唱書”爲“說書”，逐漸形成了“石韻書”、“石派書”。

對石玉昆的文字記錄還有下面這首詩：

高擡身價本超羣，壓倒江河無業民。
驚動公卿誇絕調，流傳市井效歌唇。
編來宋代《包公案》，成就當時石玉昆。
是誰拜贈“先生”號，直比談經絳帳人。 ㊦

『近代文学研究・留得』第5期（2006.2）が発行されました。劉鉄雲特集があります。中国では、現在、劉徳隆氏を中心にして劉鶚文集の編集が進行中とか。

アディソンの漢訳小説

神田 一三

1 アディソン登場

ジョーゼフ・アディソン Joseph Addison (1672-1719) は、英国の随筆家、政治家である。彼とまるで二人組のように名前が出てくるリチャード・スティール Richard Steele (1672-1729) がいる。アイルランドの随筆家、劇作家、政治家だ。両者とも生年が同じで、オックスフォード大学に学んだ。スティールが創刊した『タトラ』(週3回発行)にアディソンが投稿する。エッセイ(随筆)を掲載するという形式は、のちにふたりが創刊した日刊紙『スペクテイター』(傍観者の意。1711-12)に引き継がれた。該紙は、第555号まで発行して読者に歓迎されたという。サー・ロジャー・ド・カヴァリー(以下、サー・ロジャーと略す)という仮想人物たちを毎号のように登場させ、小説という、当時は新しい形式を勃興させるのに寄与した。辞書風に説明すれば、以上ようになる。

17世紀から18世紀にかけての人物だ。

もう少し当時が想像できるように、彼らに前後する人々の名前をあげてみよう。たとえば、「天路歷程」のバニヤン(1628-88)、「ロビンソン・クルーソー」のデフォー(1660-1731)、「ガリヴァー旅行記」のスウィフト(1667-1745)らがいる。それらの作品は、清末に漢訳されているほどにいずれも著名だ。つけ加えて物理学者のニュートン(1642-1727)もあげれば、歴史的な時代であることが理解できよう。

坪内逍遙は、アディソンとスウィフトをならべて「二大文章家」という。さらに、アディソンの著作を紹介して次のように書いている。「散文家、批評家としてのアヂソンの技倆を窺ふべき著述は、一千七百九年に其の友スチールを幫けて執筆せし『タットラア』といへる定期刊行物に掲げたる諸雑筆、及び同十一年に、同じくスチールと共に(但し此たびはおのれ其の主筆となりて)発刊せし『スペクテートア』の諸論説、記事、華文、諷刺文、等なり。『スペクテートア』は英国通俗雑誌の最古なるもの、一たると同時に、文学趣味を俗間に弘伝せし開祖なるべし。毎朝の発兌にて、五百五十五号まで続きたりき。該誌に載せたるアヂソンが文章は、真に種々雑多なりき。堂々たる長き論文もあれば、をかしき滑稽の諷刺文もあり、考証に類するや、乾燥なる取調もあれば、今の端物小説に似たる短き物語もあり、輕妙なる寓意譚もあれば、風流洒脱の論説もあり、仮に種々の人物を作り設けて、そを真に実在せる人の如くに状写し、殆ど写実小説を読むが如くに思

はしむる文もあれば、嚴肅なる倫理を談じて、読者をして襟を正さしむるに足る文もあり」*1

文中にある「仮に種々の人物を作り設けて、そを真に実在せる人の如くに状写し」というのは、サー・ロジャーという仮想人物をも含んでいると考えてよろしい。この部分が、漢訳に関係している。ゆえに、あらかじめ触れておく。

当時のイギリスにおける作家と雑誌、新聞という関係は、興味深い。デフォーは『レヴュー』を週3回、独力で発行して政治論を発表した。アディソンとステイールが『スペクテイター』を刊行してみずからの文章を掲載した。この形態は、約300年後の中国において李伯元に継承されたということも可能だ。直接には関係がない。だが、形の類似点をあげれば、という話だ。

英文学では欠かせないアディソンの存在である。だが、彼の作品が中国ではどのように受容されたか。それを記述する文章は、それほど多くない。

羅選民主編『外国文学翻譯在中国』(2003)によると、中国における紹介は以下のようなになる。すなわち、1911年には原文に漢語の注釈を加えた本が出版された。1921年、周作人が北京『晨报副刊』に「美文」を発表してそのなかでアディソンを紹介する。また、梁遇春が翻譯集に彼の文章を収録している、など*2。

1911年から1921年までの10年間は空白となっている。その間、漢訳は発行され

なかったのか。

前者については、商務印書館の図書目録を見ると掲載がある。初級中学校用の補充読本として、

『(節本)阿狄生文報摺華』Sir Roger de Coverley Papers

『阿狄生文報選録』The Spectator (Selections)

の2種類が掲げられる。宣伝をかねた自社出版目録だから発行年は記載されていない。補助教材とは、いうまでもなく学習用参考書ということだ。

漢語注釈本の英文題名を見れば、『スペクテイター』の登場人物サー・ロジャーの名前を使っている。新聞に掲載したアディソンの文章を収録した版本を基にしているとわかる。これに注釈をつけて1911年に刊行したらしい。原物を見ていないので、1911年かどうかは確認できない。だが、清末の出版であるとなればかなり早い紹介となろう。しかも、学習参考書だから若い読者が多数いたと考えるのが一般的だ。学習用参考書は文学翻訳ではない、というのなら別だが、参考書の形での受容と了解すればよい。

周作人が「美文」で書いているのは、エッセイ[原文：論文]についてだ。人名にはもとの漢訳を添えておこう。いわく、いわゆるエッセイにはふたつある。ひとつは、批評で学術性のあるもの。もうひとつは記述で芸術性があり、「美文」とも称する。「この美文は、英語国民のな

かで最も発達し、たとえば中国でもよく知られているアディソン愛迭生、ラム蘭姆、アーヴィング欧文、ホーソン霍桑らは、みなすばらしい美文を書くし、近年ではコールズワージー高爾斯威西、ギッシング吉欣、チェスタートン契斯透頓も美文の名手である」*3

外国作家名をあげて、周作人の教養の深さがうかがえる文章だということは可能だ。だが、名前が出てくるだけとは少し予想とは違った。作品の紹介がないのが残念だ。

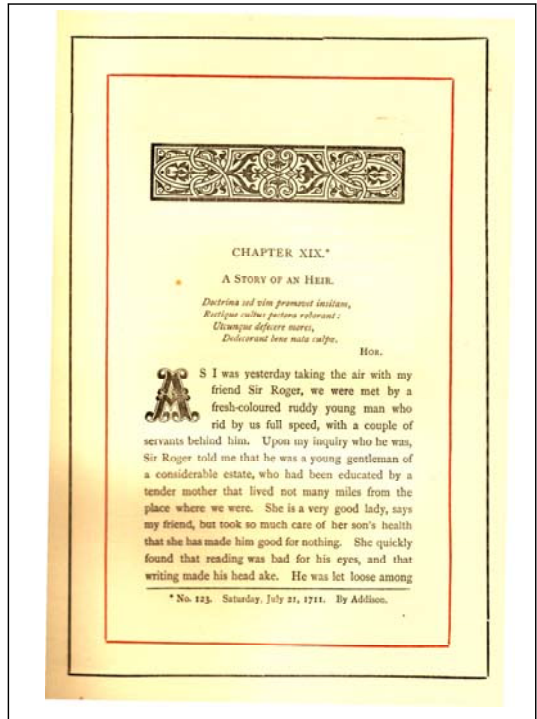
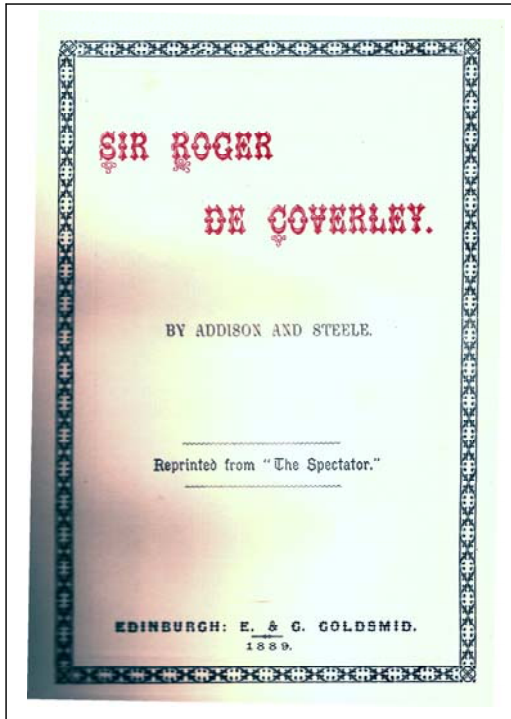
以上をまとめて、中国でアディソンについてそれほど研究が進んでいるようにも見えない。あれにない、これにない、と数え上げることは意味がない。言及が少ないからこそ、民国初期にそのアディソンの漢訳が発表されている事実には目をみはるのだ。

2 漢訳アディソン

(英)哀迪生著、遺生「易子而教」(『小説海』第2巻第5号1916.5.1)について、杜筆恩氏の指摘がある。「原作はJOSEPH ADDISONの日刊紙“THE SPECTATOR”NO.123(1711.7.21)」*4

私は、杜氏の簡潔な記述を読んで感心した。

該作品の英文原作をつきとめた研究者は、いままでいなかった。これが理由のひとつだ。原作探索をやろうとした人なら、その作業の困難さが理解できるだろう。哀迪生と示されて、それがアディソ



Sir Roger de Coverley.

お互いの子供どうして結婚し、めでたしで終わる。

教育が重要だという主旨なのである。ふさわしい教育がなされなかった若者は、役立たずの人間にしかならなかった。しかし、責任ある教育を受ければ、良識と美德をそなえた人間になる。強調されるのは「良識と美德 good Sense and great Virtue」あるいは「名誉の気持ちと美德 the Sentiments of Honour and Virtue」だ。

教訓的小説というのがアディソンの原作である。

さて、漢訳について述べる。

訳者遺生は、「易子而教」と題名をつけた。表題風に訳せば「取り替え子の教え」としてもよい。

初級中学校用の補充読本として先に書

名をあげた *Sir Roger de Coverley* の 1 種類が手元にある (Reprinted from " The Spectator. " E. & G. Goldsmid. Edinburgh, 1889)。こちらに収録された文章には、それぞれに題名がついている。該当するのは第19章 " A Story of an Heir. " だ。訳せば「後継ぎ物語」となろう。『小説海』掲載の漢訳が基づいたのがそれに類する版本であったならば、「易子而教」と漢訳題名をつけたとしても不思議ではない。

ホラティウスの詩は、省略された。

漢訳の質はどうか。

アディソンの文章のおもしろさは、つぎのような箇所に見られる。

「要するに、彼には健康の蓄積はたくさんあるが、それ以外は何もない、すなわち、人間の本分がただ生きることだけ

であれば、州全体のうちにこの若者ほどそれをなしとげている者はいないということ友人の説明から私は理解したのである。To be brief, I found, by my Friend's Account of him, that he had got a great Stock of Health, but nothing else; and that if it were a Man's Business only to live, there would not be a more accomplished young Fellow in the whole County.」

直接は説明しない。役立たずの若者を描写して、まわりくどく皮肉をまじえて書く。読者は、それを読んでニヤリとする。ここに特長があるのだ。

この部分について、漢訳はつぎのようにした。

「私の友人の言葉から、この者は強健な身体のほかには得るところがなかったと理解した。もし人生の事業が生活するだけであるならば、この者はもともとこの地方において完全な人間なのである。由余友言。可知此子除其一副強健之軀殻外。別無所得也。設人生事業僅為生活。則此子固此郷之完人矣」

文言で過不足なく翻訳している。

以上のような調子で翻訳されており、全体を通じて大幅な省略もしない。基本的に忠実な漢訳である。

訳者は、「訳者識」において中国の教育について次のように書いている。「今日のがわが国は、教育のない国だといえる。国民は、教育がない国民だといえる。教育制度は、多くが不良で、人民の教育に対する考えは、またきわめて薄弱である」

教育に対する訳者の認識が、200年あまり前の随筆的小説を漢訳させた理由であったようだ。

掲載誌『小説海』について、簡単に紹介しておく。

今から70年前の日本で該誌が紹介されている。70年前の文章を引っぱり出すか、といわれそうだ。それが必要になるくらい現在でもこの分野の研究は少ない、とご理解いただきたい。

実藤恵秀が、「文芸雑誌の変遷10」において、次のように紹介している。「内容は挿画数葉を巻頭に挿み、短篇小説、長編小説、雑俎、詩の順序。誌名の示す如く小説を主としてゐるが、其の特色は、内容文体共に旧態を墨守してゐる点である。この点小説月報あたりと面白い対照をなしてゐる」*5

「内容文体共に旧態を墨守してゐる」というのは、『小説月報』に比較してという意味だ。ただし、1915年当時の『小説月報』は、まだ改革以前である。実藤がわざわざそのように説明したのは、革新的な『小説月報』という印象を強く抱いていたからだと考えられる。あるいは、該誌は鴛鴦蝴蝶派に属すると判断していたためか。鴛鴦蝴蝶派という名称が出てくれば、否定的に見る、というのが従来の考え方だった。だが、上に見たようにアヂスン作品も掲載されている。まじめな編集であるといえよう。それほど単純ではない。

『小説海』の発行元は、中国図書公司和記という。前身の中国図書会社が、清

末において商務印書館に対して激しく攻撃をしかけたことは有名だ。商務印書館が日本の金港堂との合併会社であると批判するのだ。異民族と手を組んだ組織であることを理由に目の敵にした。しかし、内部組織、歴史、経験ともに商務に及ばず、1914年4月、商務に逆に買収された。改名して中国図書公司和記と称する*6。

以上のいきさつをふまえれば、『小説海』は、ほかならぬ商務の身代わり会社が発行していたことがわかる。「旧態を墨守」させていたのは、『小説月報』を同時に発行していた商務印書館自身だった。



【注】

- 1) 坪内雄蔵『(文学叢書) 英文学史』東京専門学校出版部1901.6.2/1902.2.10再版。380-381頁
- 2) 羅選民主編『外国文学翻譯在中国』(合肥・安徽文藝出版社2003.12)の「第二章 英国文学翻譯在中国」に収録された次の2節を参照した。劉炳善「第一節 英国隨筆翻譯在中国」(87-88頁に言及がある)。張旭、車樹昇「第二節 英国散文翻譯在中国」(同上95-96頁)
- 3) 周作人『談虎集』上海・北新書局1936.6五版。41頁
- 4) 杜筆恩「『新編増補清末民初小説目録』の『小説海』掲載作品正誤・補」『清末小説から』第80号2006.1.1。11頁
- 5) 『中国文学月報』第14号1936.5.1。42頁。影印本による。原文は無署名。
- 6) 朱聯保編撰『近現代上海出版業印象記』上海・学林出版社1993.2。103頁。朱は中国和記図書公司と書いている。謝菊曾「《小説月報》史話(附《小説海》及《小

『新編増補清末民初小説目録』の『小説海』掲載作品正誤・再補

杜 筆 恩

拙稿を第80号に発表後、『小説海』掲載作品について更に“創作に分類されているが実は翻訳”という作品や翻訳に分類されている作品の詳しい情報が判明したので、報告する。

d0737 断崖 六符 『小説海』1巻4号1915.4.1

* 創作ではなく、翻訳。原作は徳富蘆花『自然と人生』(民友社1900.8.18)中の「寫生帖」内の「断崖」。

説世界》)」「涵芬楼往事」『隨筆』第7集1980.4。57頁)は、鴛鴦蝴蝶派の小説雑誌に体裁を近づけたものとして『小説海』を紹介している。

【参考文献】

門田俊夫「『スペクテイター』13 第116号から第125号」『大阪経大論集』第50巻第3号(通巻第251号)1999.9.15

【附記】杜筆恩氏より資料の提供を受けました。感謝します。

o0046 歐洲政界之女傑 雲五 『小説海』

3巻9号1917.9.5

* 創作ではなく、翻訳。原作は蘆花生(徳富蘆花)『世界古今名婦鑑』(民友社1898.4.19)中の「歐洲政界の三女傑」の「一、無官の露國全權大使(ノヴィコフ夫人)」。

漢訳アラビアン・ナイト (16)

z0243 折獄神術 枕流 『小説海』3巻7号

1917.7.5

* 創作ではなく、翻訳。原作は ALEXANDRE DUMAS の作品、英訳名“ THE MAN OF THE KNIFE ”。

樽本照雄

法語原作名、発表年、発表形態は未詳。英訳が“ ELLERY QUEEN'S MINIMYSTRIES ” (edited by ELLERY QUEEN World Publishing Co.1969未見)や“ 100 CROOKED LITTLE CRIME STORIES ” (edited by ROBERT WEINBERG ほか Sterling Publishing Co., Inc.1994)に収められている。

フォースター版とスコット版の検討
長い間、レイン版、タウンゼンド版、サグデン版を使用して、漢訳との語句の異同をさぐってきた。その結果は、それぞれの本文がバラバラであることがわかっただけだ。ゆえに底本を1本に絞りこむことができなかった。

なお、この徳富蘆花の作品や『清末小説から』第80号で取り上げた探偵小説等については、初出が新聞・雑誌掲載らしく、漢訳者が基づいたのは単行本ではなく、それら初出の新聞・雑誌かもしれない。原作に関して、初出と単行本とが異なる例を御存知の方は御指教下さい。☞

コダダッド物語の冒頭部分は、漢訳の底本がフォースター版、あるいはスコット版である可能性を強く指し示している。ここにいたってようやく、底本を決定する段階にたどりついたように思う。

いままで指摘してきた多くの異同箇所について、フォースター版とスコット版ではどのようになっているのか、検討してみよう。

物語の書き出し部分である。

『清末小説』第29号は、現在、鋭意編集中
本年10月頃発行予定

【説部叢書】上古時波斯国跨大陸。據島嶼。東渡恒河。達支那之西部。並印度諸部隸焉。其幅員至遼闊。撒森尼安歴史。

載当時有主波斯者。英武好兵。威稜讐鄰國。(古代、ペルシアは、大陸をまたぎ、島々をおさめ、東はガンジス川からシナの西に達し、インド諸部はつき従っており、その地域ははてしもなかった。ササン朝の歴史には、当時、勇ましく軍事を好み、威光で隣国をおびえさせるペルシアの支配者がいたことを記録している)

【フォースター】IT is recorded in the chronicles of the Sassanians, those ancient monarchs of Persia, who extended their empire over the continent and islands of India, beyond the Ganges, and almost to China; that there was an illustrious prince of that powerful house, who was as much beloved by his subjects for his wisdom and prudence, as he was feared by the surrounding sates, from the report of his bravery, and the reputation of his hardy and well disciplined army. (ササン朝の年代記において、その帝国をインドの大陸と島々をまたぎ、ガンジス川を遠く越えて、ほとんど中国にいたるまでおしひろげたペルシアの古代の王様たちのなかに、強力な一族の輝かしい王様が存在し、その聡明さと思慮深さによって自国民から愛され、彼の勇敢さと彼の強力で訓練のいきとどいた軍隊によって隣国から恐れられていた、と記録されている)

漢訳は、フォースター版のそのままであるといってもいい。ペルシア、ガンジス、ササン朝と、どれひとつとして取り落している単語はない。

以前示したサグデン版は、このフォースター版を原本にしていると考え。もとの語句を一部分置き換えただけなのだ。似ているはずだ*³⁴。

それでは、スコット版ではどうか。

【スコット】The chronicles of the Sassanians, ancient kings of Persia, who extended their empire into the Indies, over all the adjacent islands, and a great way beyond the Ganges, as far as China, acquaint us, that there was formerly a king of that potent family, who was regarded as the most excellent prince of his time. He was as much beloved by his subjects for his wisdom and prudence, as he was dreaded by his neighbours, on account of his valour, and well-disciplined troops. (ササン朝の年代記において、その帝国をインドの大陸と隣接した島々をまたぎ、ガンジス川を遠く越えて、ほとんど中国にいたるまでおしひろげたペルシアの古代の王様たちのなかに、かつて強力な一族の輝かしい王様が存在し、その時代のもっともすばらしい君主だと尊敬されていた。その聡明さと思慮深さによって自国民から愛され、彼の勇敢さと彼の強力で訓練のいきとどいた軍隊によって隣国から恐れられていた)

スコット版にはある“who was regarded as the most excellent prince of his time”という箇所が、漢訳には見えない。

ごくわずかな違いだけだから、冒頭部分だけでは、フォースター版かスコット版か漢訳の底本問題には、決着はつかない。

兄弟王がそれぞれ妃に裏切られる物語について、漢訳をもとにして英訳3種類

との対応を見たことがある。同じ箇所についてフォースター版とスコット版を加えて示す。(レイン版/タウンゼンド版/サグデン版/フォースター版/スコット版の順。

:一致、×:不一致、無:該当する箇所が存在しない)

漢訳	レイン版/タウンゼンド版/サグデン版/フォースター版/スコット版
#1 撒森尼安(ササン王朝)	×無 / Sassanian / Sassanians / <u>Sassanians</u> / <u>Sassanians</u>
#2 十年(10年間)	×twenty years / ten years / ten years / <u>ten years</u> / <u>ten years</u>
#3 忽念后不置(妃をおもう)	×he had left in his palace an article / once more to see his queen / ×無 / <u>once again to embrace his queen</u> / <u>once more to see the queen</u>
#4 奴(奴隷)	×a male negro slave / a slave / ×無 / <u>another man</u> / <u>a man</u>
#5 自牖棄屍溝中(窓から死体を溝になげすてた)	×slew them both in the bed / he threw their dead bodies into the foss or great ditch / ×無 / <u>he threw them from the window into the foss, that surrounded the palace</u> / <u>he threw them out of a window into the ditch that surrounded the palace</u>
#6 俄婢十人各弛服。黒奴如婢数(下女10人と同数の黒人奴隷)	twenty females and twenty male black slaves / ×hold secret conversation with another man / ×無 / <u>out came twenty females</u> / <u>ten of them were black men, and that each of these took his mistress</u>
#7 美蘇得(メスード)	Mes'ood / ×無 / ×無 / <u>Masoud</u> / <u>Masoud</u>
#8 計九十有八(指輪98個)	ninety-eight seal-rings / ×無(魔神と美少女部分そのものを省略する) / ×無 / <u>ninety-eight</u> / <u>fourscore and eighteen</u> (80と18で98)
#9 縛后	×caused his wife to be beheaded / ×to death his unhappy sultana / ×無 / <u>her to be bound</u> / <u>her to be bound</u>
#10 手殺諸婢奴(下女奴隷を殺し)	in like manner the women and black slaves / the unworthy accomplice of her guilt / ×無 / <u>beheaded all the sultanness's women with his own hand</u> / <u>cut off the heads of all the sultanness's ladies with his own hand</u>
#11 3年間は漢訳にもない	three years / ×無 / ×無 / ×無 / ×無

以上を見るかぎり、漢訳は、例外なくスコット版と一致している。フォースター版は、#6のみが微妙にズレているだけだ。

タウンゼンド版にのみつけられている

と思った口バに関する注釈は、フォースター版、スコット版にも存在するのだろうか。

【説部叢書】東方風俗，牛驢異待，牛作苦，驢則供王侯官吏驅馳，顧慮甚至。近

埃及副王曾以白驢贈威爾士親王，副王維嘉爾因此驢得優賞。一千[八百]六十四年秋，伊斯林頓開農學博覽會，此驢與焉。(東方の風俗では、牛とロバでは待遇が異なっていた。牛は苦役に使われ、ロバは王侯官吏の走りに提供され、とてもよい世話をしてもらっていた。最近、エジプトの副王が白いロバをウェールズ親王に贈った。副王ヴィカーは、このロバによって優秀賞をえて、1[8]64年の秋、イスリントンで農學博覽會が開催されたとき、このロバも参加したのである)6頁

不思議なことに、ここに示した注釈は、スコット版にはない。スコット版は、全冊をつうじて注釈そのものが存在しない。読物として考えられているからだろう。

フォースター版には、注釈はつけられてはいるが、その数が少ない。また、タウンゼンド版ほど詳しくないし、だいいち上に示した注釈は、もともと存在しない。

フォースター版、スコット版ともに注釈がないとなれば、奚若は、注釈部分にかぎってタウンゼンド版を参照したということになるだろう。

漢訳における注釈の存在は、当時の読者にアラビアン・ナイトと理解してもらおう工夫のひとつだ。重視すべきだと考える。

注釈があるということ、それも、別の版本を参照していることになれば、奚若は、複数の版本を手元において漢訳を進めていた事実を私たちに教えてくれる。

やっつけ仕事とか、豪傑訳とか、読者を無視した翻訳とは無縁の仕事だとわかる。奚若の誠実な翻訳姿勢を見ることができよう。

牝シカに変身している妻が「従妹」であるという箇所だ。

【説部叢書】叟曰。此鹿為予中表妹。當髫歲。即歸予為室。凡世閱卅寒暑。無所出。予雖不弛愛。不能無念嗣統(老人は語った。この鹿は私の従妹です。幼い頃、私の家に嫁ぎました。30年をすごし、なにごともしなかったのです。私は愛してはいましたが、跡継ぎがないのを残念に思わないわけにはいきませんでした)15頁

漢訳でわざわざ「中表妹(従妹)」としているのは、原文がそうなっているからだ、と予測した。

フォースター版では「従妹 cousin」だ。スコット版も「従妹 cousin」とする。

父親は、姿の見えない息子を待つて何ヵ月が経過したか。

「8ヵ月 eight months」がタウンゼンド版だった。サグデン版は「2ヵ月 two months」、レイン版は「1年 a year」とする。

漢訳は、なぜかしら「3ヵ月 三月」(15頁)になっており、しかも、のちの重版では「1ヵ月 一月」(14頁)に変更していることはのべた。

フォースター版、スコット版ともに「8ヵ月 eight months」となっており、漢訳と異なる。異なる理由は不明とせざるをえない。

商人の罪は3分の1なのか、それとも2分の1なのか。

魔神が不思議な話を聞いて「商人の罪の3分の1を許してやろう。当為汝宥賈罪三之一可矣」(17頁)という。物語る人物が3名いるから、3分の1というわけだ。

フォースター版、スコット版ともに3分の1としており、漢訳と一致する。

タウンゼンド版では、2分の1としていた。つまり2名が登場するだけだから、それに合わせてある。

漢訳とは異なるから、底本はタウンゼンド版ではないことを確認できる。漢訳者の勝手な改編ではないという意味でもある。



【注】

34) ねんのために冒頭部分をかかげておく。

【サグデン】IT is written in the chronicles of the Sassanians - those ancient monarchs of Persia, who extended their empire over the continent and islands of India, beyond the Ganges, and almost to China - that there once lived an illustrious prince of that powerful house, who was as much beloved by his subjects

for his wisdom and prudence, as he was feared by the surrounding states, from the report of his bravery, and the reputation of his hardy and well-disciplined army. (ササン朝の年代記において、その帝国をインドの大陸と島々をまたぎ、ガンジス川を越えて、ほとんど中国にいたるまでおしひろげたペルシアの古代の君主たちのなかに、かつて強力な一族の輝かしい君主が存在し、その聡明さと思慮分別によって自国民から愛され、勇敢だという評判と彼の強力で訓練のいきとどいた軍隊の世評によって隣国から恐れられていた、と記録されている)

清末小説から

康 東元 清末における日本近代文学作品の翻訳と紹介 日本文芸の中国における受け入れ方(1) (筑波大学図書館情報メディア研究科)『図書館情報メディア研究』第2巻第1号 2004.9.30

『日本近・現代文学の中国語訳総覧』黒古一夫監修 勉誠出版株式会社2006.1.20

中国における日本の近・現代文学の翻訳 同上

黒古一夫 日本文学、世界へ 同上

寇 振鋒 清末『新小説』誌における『歴史小説洪水禍』 明治政治小説『経国美談』からの受容を中心に 名古屋

- 屋大学『中国語学文学論集』第17輯
2005.3
清末の漢訳政治小説『累卵東洋』
について 明治政治小説『累卵の
東洋』との比較を通して 名古屋大
学国際言語文化研究科『多元文化』
第6号 2006.3
- 賈植芳、陳思和主編 『中外文学關係史資料
彙編(1898-1937)』上下冊 桂林・
広西師範大学出版社2004.10
- 程毅中 20世紀通俗小説研究回顧 陳平原
主編『現代學術史上的俗文学』武漢
・湖北教育出版社2004.10
- 劉萌柏 阿英の俗文学研究 陳平原主編
『現代學術史上的俗文学』武漢・湖
北教育出版社2004.10
- 夏曉虹 傲骨原宜老布衣 説林紆の“好
名” 陳平原、夏曉虹『同学非少年
：陳平原夏曉虹隨筆』西安・太白文
藝出版社2005.1
- 陳平原 『触摸歷史与進入五四』 北京大
学出版社2005.9
- 蔣曉麗 『中国近代大衆伝媒与中国近代文
学』成都・四川出版集团巴蜀書社20
05.6 比較文学与文藝叢書
- 苗懷明 『中国古代公案小説史論』南京大
学出版社2005.9
- 樽本照雄著
- 陳星 『説不尽的李叔同』北京・中華書
局2005.9/2005.12北京第2次印刷
『李叔同身边的文化名人』北京・
中華書局2005.10
- 魏朝勇 『民国時期文学的政治想像』北京
・華夏出版社2005.11/2006.1北京第
1次印刷
- 利波雄一 旧派文芸雜誌序言認識(『紅玫瑰』
『小説大觀』)中国近現代文化研究
会編 『中国近現代文化研究』第8
号 2005.12.25
- 中村みどり 放蕩留学生と日本女性 『留
東外史』及び『留東外史補』『留東
新史』について 『野草』第77号中
国文芸研究会2006.2.1
- 徐麗芳、吳永貴、孫強、陳幼華、汪濤編
『中国百年暢銷書』西安・陝西師範
大学出版社2001.12 世紀閱讀文庫
4
- 『清末小説から』第81号 2006.4.1
美華書館名称考(1)樽本照雄
晚清小説作者掃描(陸)武 禧
商務印書館の火災(2)沢本香子
漢訳アラビアン・ナイト(15)樽本照雄
潘建国「近代小説的研究現状与學術空
間」を読む樽本照雄

初期商務印書館研究 増補版

A5判 上製 箱入り 548頁 限定200部 定価：10,500円

清末小説研究論

B5判 417頁 限定150部 定価：5,250円

樽本照雄がこの30年間に発表した「清末小説」の「研究」に関する文章を集めました。

1975-1980年

清末小説研究に思うこと / 幻の雑誌『新小説』 / 曾虚白氏のこと / 魏紹昌編『擘海花資料』について / 魏紹昌氏の李伯元に関する2篇の論文 / 魏紹昌氏とその著作 / 研究論文見本帖 / 魏紹昌氏のこと / 翻訳に訳者の姿勢が見える 阿英『晚清小説史』の翻訳を読む / 『新小説彙編』のこと

1981-1990年

中国近代文学研究は復活しつつあるか / 『訳林』のこと / 雑書を掘り起こす / 責めないで 天津留学日記 図書館の巻 / 天津図書館所蔵の吳趸人著作 / 研究結石 / 将来がたのしみな中国の清末小説研究 / 張純氏と『晚清小説研究通信』 / 劉鉄雲故居訪問日記 / 『清末民初小説目録』について / 阿英の清末小説観 中島利郎「阿英『晚清小説史』の成立」を読んで / 陳遼「關於《老残遊記》の一樁公案」を読む / 発情継交 中国近代文学研究を日本でやる意味

1991-2000年

史料と研究 / 飯田吉郎編『現代中国文学研究文献目録(増補版)』のこと / アジアが動く国際学会 / 言語に垣根はあっても、研究には国境はない / 中国近代文学国際学術研討会参加雑記 / 勝手に仕切り直しする岡田さんへ / 押しつけられる側の発言 または、岡田さんの研究姿勢 / 画期的な書評 / 掲載誌の価値 / 陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典』について / 中村忠行先生の思い出 / 資料発掘と立論 魏紹昌『晚清四大小説家』 / 済南再会 嚴薇青氏と老残遊記研究 / 劉蕙孫氏のこと / 『相浦泉文庫目録』について / 橋本循記念会第6回「蘆北賞」受賞のことば / 半歩大前進 『中国近代文学大系』史料索引集を読む / 時代を反映する小説目録 『新編清末民初小説目録』のこと / 定価が中途半端である理由 『新編清末民初小説目録』ができるまで / 嚴薇青氏のこと / 中島利郎『晚清小説研叢』について / 『清末民初小説書系』の発行 / 文献をあつかう姿勢 『吳趸人全集』を例として / 劉德隆『劉鶚散論』序 / 探求書 『和文漢読法』ほか / 本格的翻訳文学研究の出現 郭延礼『中国近代翻訳文学概論』について / 李伯元研究の広がりと深化 王学鈞編『李伯元全集』第5巻の特色 / 『明清小説研究』の清末小説研究 / 発言のあと 「不要輕視小事」のこと(附: 竺慶麟氏の反論) / 『新加坡国立大学中文圖書館蔵中国明清通俗小説書目提要』の清末小説部分について / 『中国近代小説目録』の出現 附: 『中国近代小説目録』疑問表 / 抛るべき研究文献 劉大紳「關於老残遊記」の場合 / あるがままの小説年表 『清末民初小説年表』の構想 / 清末小説研究の現状 日本で研究を行なう意味 / 李錫奇『南亭回憶録』のこと / 『中国近現代通俗文学史』の出版予告 / 橋本循記念会第9回「蘆北賞」受賞のことば / 『図画日報』影印版のこと 附: 『図画日報』所載小説目録

2001-2004年

清末翻訳小説研究周辺 英国図書館における文献検索の実例 / 新しい商務印書館研究 吳相『従印刷作坊到出版重鎮』について / 中国人は、ホームズを乾し殺した!? / 忘れられた増注本系『官場現形記』 / 新編増補清末民初小説目録序 / よみがえる『出版史料』 / 大塚秀高氏の文章2篇 『老残遊記』と『官場現形記』に關連して / 周作人漢訳アリ・ババの原本を求めて / 『老残遊記』の底本から回想録まで3題 / 『唐弢蔵書目録』について 清末小説の方面から

清末小説研究会

日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜8-4-202 樽本照雄方